

P-076

年長児に対する「からだのしくみ」を題材とした健康教育に関する研究—保護者と子育て支援者の実態調査—

川瀬 浩子¹⁾、宮崎つた子^{1,2)}

¹⁾三重県立看護大学 地域交流センター、
²⁾三重県立看護大学 看護学部

【目的】

年長児に対する「からだのしくみ」を題材とした教育（以下健康教育）に関し、保護者と子育て支援者の実施状況やニーズを明らかにして、今後の事業の取り組みを検討する。

【方法】

A地方の保育所等の年長児の保護者と子育て支援者（保育専門職者・地域の子育て支援者等）を対象とし、2024年7月～8月に質問紙調査を行った。質問紙は基本属性、健康教育の実施状況（経験の有無、内容等）、健康教育に対する考え方（伝える必要性・時期等）と支援への要望で構成した。年齢等量的データは記述統計、質的データはχ²検定等、自由記述は内容の整理を行った。なお本調査は、所属機関の研究倫理審査会の承認（211603）を得た。

【結果】

対象は、保護者243名（回収率57.6%）、子育て支援者70名（回収率80.0%）であった。保護者は母親が最も多く30歳代、子育て支援者は40歳代が多く、経験年数は様々であった。健康教育経験「有」は、両者とも60%以上を占めた。健康教育は、両者とも約95%以上の者が必要と考えているが、同時に伝える難しさを感じていた。その理由は、「伝えるのが難しい」「（からだのしくみへの）自分の理解の不安」であった。伝える時期は、年長児が「ちょうどよい」が約75%と最も多かった。「やや遅い」、「遅い」とする者も、1割弱であり、その適切な時期は年中児で、理由は「ネット等、不適切な映像など知る機会が多いため」等であった。一方、健康教育経験の有無別の保護者では、健康教育経験「有」の者が、「無」の保護者より、「健康教育の必要性」を有意に感じていた。支援の要望では、保護者は「教材」、「専門職」、「学ぶ機会」、子育て支援者は「教材」、「学ぶ機会」、「専門職」の順で、保護者に比し、子育て支援者の方が「学ぶ機会」を強く望んでいた。さらに、健康教育経験の有無別では、健康教育経験「有」の者が「無」の者より、「教材」で、保護者・子育て支援者共に、有意に必要性を感じていた。また、学ぶ機会で、子育て支援者では、「有」の者が「無」の者より、必要性を感じていた。

【考察】

健康教育の難しさへの対策は、からだのしくみに関する知識の普及や、保護者や子育て支援者の健康教育経験者による実施の紹介を行い、さらに子育て支援者へは学ぶ機会への支援を充実していく必要がある。また、教材への支援の要望が強いため、活用できる教材の紹介や、一緒に教材を開発していくことが望まれる。

P-077

保育園における包括的性教育にむけて－大人が語り合うことで始まる幼児期の性教育－

吉田 千穂¹⁾、小西 美樹¹⁾、松本 多絵²⁾

¹⁾日本医科大学多摩永山病院看護部、

²⁾日本医科大学多摩永山病院小児科

【背景】 幼児期からの包括的性教育の重要性が指摘され、小学校では「いのちの安全教育」が開始された。しかし、「性教育＝思春期の話」という認識が根強く、幼児期に適したアプローチが確立されていない。また、保護者や保育士自身が性について話す機会が少なく、それが幼児期からの性教育の難しさにつながっている可能性がある。【目的】 本研究は、性について恥ずかしがらずに安心して話すことができる環境作りを目的とする。まずは、大人同士が性について話し合う場を設けることで、性に関する発言をタブー視せず、家庭や保育園での性に関する会話のハードルを下げ、性教育の導入を促進できるかを検討する。【方法】 希望する保護者、保育士を対象に、保育園で性教育講義とワークショップを年2回実施した。講義では、小児科外来でよく受ける質問を取り口に、人間関係、性の多様性、ジェンダー平等といった包括的性教育の基本的な視点を含めた内容とした。大人が性について話せるようになることが幼児期の性教育のスタート地点であると考え、ワークショップでは、「お風呂に一緒に入るのはいつまでか？」や「赤ちゃんはどうやって生まれるの？」など、身近なテーマで大人同士が日常的な疑問を率直に話し合える場を提供した。【結果】 参加者からは、「他の家庭の意見が新鮮だった」「環境や世代によって考えが異なると実感した」という声が多く、「子どもに教える前に、まず大人が学ぶことが大切」との気づきも得られた。また、「自分自身が性を恥ずかしいと思っていることに気づいた」「性について他人とオープンに話す機会がなく、今回の取り組みが貴重だった」など、大人同士が語る場を持つ意義が確認された。【考察】 幼児期の性教育を進めるには、子どもへの指導の前に、大人が話しやすい環境を整えることが有効だった。ワークショップを通じて、「大人が性について語る経験自体が性教育につながる」との視点が得られ、教育者自身が学び、理解を深める場の重要性も確認された。【結論】 幼児期の性教育の導入に向けて、まず教える側が性について学び、話し合う環境を整えることが有効であることが示された。保護者間、保育士間での意識共有と議論の機会を作ることで、園全体としての性教育方針を検討する基盤を築くことができた。今後は、子どもへの具体的なプログラムとその影響の長期的な評価が課題となる。